

平成27年度副知事と県民の意見交換会概要

テーマ：「若い農業者が拓く新しい農業」

日時：平成27年7月17日（金）9：30～12：00

場所：横手市実験農場

※意見交換に先立って、大沢ファーム果汁加工所にて、ブドウジュースの製造現場を視察。

(副知事あいさつ)

知事はロシアに出張しており、本日の意見交換会は私が担当することになった。

さて、県では各地域振興局を単位に様々な分野の方々と意見交換会を行っている。今日は農業をテーマとした意見交換会であるが、この横手平鹿地区は、県内の中でも米と米以外の作目、野菜や果樹などバラエティに富んでいる地域であり、また加工分野や6次産業化の取組の面においてもリーダー的な役割を担っている。本日は、若い農業者の方に集まっていただいております、非常に楽しみにしています。本日はどうかよろしくお願ひしたい。

※実験農場の取組について視察。

【参加者自己紹介】

(A氏)

就農して2年目。山形県酒田市の出身である。ランドベースという屋号で農業をしている。栽培品目としてはミニトマトを主体としており、その他直売所向けに多品目の野菜を生産している。

(B氏)

大学卒業後、山形県のガールズ農場で農業研修をした後、今年の春に生家に戻り就農したばかり。家では少量他品目の栽培で主に直売所向けの出荷が主である。今年から小玉スイカの栽培に取り組み始めた。

(C氏)

静岡県の出身。結婚を機に秋田に移住した。家族で農業をやっており、トマトを4種類と米を栽培している。今年の冬から規格外のトマトを活用した加工品の製造に取り組む予定である。

(D氏)

就農して11年目。仲間と一緒に会社を立ち上げ、年間を通じたシイタケ栽培に取り組んでいる。

(E氏)

2011年の豪雪の年に就農して4年目。リンゴを主体に洋ナシ、サクランボの栽培に取り組んでいる。またリンゴ、洋ナシのジュース加工にも取り組んでいる。

(F氏)

ブドウ農家でブドウの栽培とブドウ、洋ナシ、モモのジュースの加工・製造に取り組んでいる。また、横手市観光協会の協力のもとジュース販売にも力をいれている。

(G氏)

道の駅十文字に関わっている。本日はよろしくお願ひ申し上げます。

(A氏)

研修期間が2年間あったが、その後一人で農業を始めた。研修では数人のグループでやったことも、今では一人でやらないといけないので2倍も3倍も時間を要する。

当初立てた計画よりも売上げが思うようにはあがらず、自分の立てた計画の甘さを感じたところである。

また、農業近代化ゼミナールに所属しており、同じ年代の仲間と情報交換ができるので、息抜きの場や刺激を受ける場として助かっている。

県外に限らず、県内や地元からも若い方が農業を始めてもらいたいと思うし、やがてはそういった方へのサポートをしたい気持ちがある。

(B氏)

母と祖母と農業をやっている。世代によって考え方が異なるのでそういった点はやりづらい面と感じている。一方で、自分が就農したことにより、家族とのコミュニケーションが円滑になったし、地域の夏祭りの司会を依頼されるなど、地域の方からも声をかけてもらえるようになった。少しずつ地域の雰囲気が変わってきていることを実感している。

(C氏)

県外から秋田に来て11年目になるが、ようやく6次化の取組という自分がやりたいことが見付き、その実現に向かって取り組んでいるところである。きっかけはトマトは非常に規格外が多く、自家消費しても間に合わないため、周囲に相談したところ、加工に取り組んでみたらどうかと言われたことである。秋田県は、静岡県に比べて加工品の種類が非常に少ないと以前から感じていた。

地域の状況を見ると、高齢化で農業を辞めていく方が多い。将来的には自分の子供にも農業を継いでもらいたいと思っている。

(D氏)

米農家で稲作の手伝いから始めた。冬場に栽培するものを探していたところ、シイタケ栽培に出会った。

初年度は、かなりの投資をしており、その分きちっとした仕事をしなければいけないと思った。その後、10年間かけて徐々に規模拡大を進めてきた。

今のところ、年間を通じた生産と収入の確保が出来ており、法人の構成員の後継者の確保の目途もたってきている。

(E氏)

就農した年の2011年は豪雪の年だった。その年の4月は、雪害の被害にあったリンゴの木を切ったり、根を掘り返したり、改植といった作業など様々な経験をした。

その後、いろいろな方に教わりながらこれまでやってきたが、生産だけでなく、販売や営業もやらないといけないと感じた。

私には子供が2人いるが、自分の仕事を子供たちの目の前で見せることができることは子供にとって良いことだと思うし、将来農業をやりたいと言ってもらえるようにがんばりたい。また、高齢化で農業をやめていく方も多い。これから地域を引っ張っていく役割を担っていきたい。

(F氏)

就農した時に思ったことは、農業で十分な所得を得たいということだった。その後、農業をやっていく中で思いも変わってきており、今では自分の作ったものをどうやって情報発信していくか、横手の名前をどうやって知ってもらおうかということを感じるようになった。

大沢ファームのブドウジュースの加工も今年で3年目を迎える。過去2年間、旧正月の時期に香港のシティスーパーで横手市観光協会と連携のうえ、ジュース販売を行ってきた。初年度に感じたことは日本の農産物に対する信頼がこれほどまでに大きいのかということと、自分たちの商品の価値を見いだしてくれる人が世界には必ずいるということだった。そういった経験があったからこそ2年目は、横手や秋田という名前をどうやって発信していこうかということが考えられるようになった。

これからも自分の思いは変わるとは思うが、10年後にはもっといいことを考えていきたい。

(G氏)

道の駅での販売を通して感じることは、秋田県には他に誇れる商品がたくさんあるということである。東京のアンテナショップ美彩館で平鹿リンゴを販売したとき、店頭にのぼりを出してもお客さんから「青森県のリンゴですか」と聞かれることがあった。実際に試食してもらえば、その良さが分かってもらえるし、翌日に買いに来てくれる人もいる。平鹿リンゴは12月から1月の時期であれば、そのジューシーさは他の産地に負けないと思うし、旬をとらえた販売を行うことが重要だと感じている。

また、道の駅の産直の会員は約250名であるが、20代の方が増えてきており非常にうれしい。今日参加されている皆さんにはもっと自信をもってもらいたい。

(F氏)

ブドウ作り、ジュースの加工、横手や秋田の名前を外に発信していくことなど、今後の抱負はたくさんある。

ジュースの販売に関して言えば、来年の旧正月の時期にマカオにブドウジュースを売りに行く予定である。将来的には東南アジア、中東を市場として視野に入れている。

また、自分が農業をするうえでの目標としては、若い人や子供たちに将来的に農業をやりたいと思ってもらえる農業をすることである。農家の息子だから農業を継ぐといったことでなく、自分たちの背中を見て、子供たちが積極的に農業をやりたいと思ってもらえるような環境を整備できたらいいと考えている。

(E氏)

自分の子供たちが大人になった時の地域のことを考えると非常に不安である。子供自体が少ないし、

同年代の人も結婚していない人が多い。今は家族で経営しているが、規模を拡大して一つの経営体として、地域を支えていかなければと思っている。

増田町全体で考えると、増田の街並みが重伝建に指定されたこともあり、観光地として注目を浴びているが、たとえば増田を代表する土産物が少ない。増田にきたお客さんにもう一度来てもらえるよう、増田の魅力を自分なりに伝えていかなければいけない。農業と観光が連携した取組が必要。農業のみならず地域全体のことも視野に入れた取組を進めていきたい。

(D氏)

まずは、これからも確かなものを生産して安定的に供給することを継続したい。就農した1年目は一人でシイタケ栽培をやったものの、適切な時期に収穫できずに品質が悪くなるなど思うようにいかなかったため、雇用の必要性を感じた。現在では50人のパート職員を雇用している。自分も含めパート職員の方も十分な所得が確保できるよう、その形を見せてくれた地域のリーダーの存在があったからこそ、後継者が育ってきたと感じている。そういった姿を自分も若い世代に見せたいと思う。

また、職業の選択肢の一つとして農業が入ることが大事である。農業でも十分な所得が確保できることを伝えていけたらと思っている。

(C氏)

幼稚園向けの給食を作ることになった。これからの子供たちに安心して食べられるものを提供したいと思っている。また、最近は農家の子供が少なくなったせいか、食材の旬を知らない子供たちが増えている。

地元の食材を使った給食の提供を通じて、地元の食材の良さや旬などを子供たちに伝えていくのが今の目標である。

他県から秋田に来て思うことは、秋田県産の農産物の知名度は本当に低いことである。関東では、りんごは長野、ブドウは山梨といった具合である。農業や加工の取組を通じて秋田のPRにも協力していきたい。

(B氏)

今年から農業を始めたばかりであり、まだ目指す方向性は固まってはいないものの、自分で売ることの大切さを実感しているところである。生産者は作るプロではあっても売るプロではないし、消費者と直に接する機会は少ない。自分で直接売ることによって消費者の生の声を得ることができるし、そうすることで自分の商品の客観的な立ち位置が見えてくる。それを今後の生産に反映させることが大事である。

(A氏)

会社組織を立ち上げることが今の大きな目標。ランドベースという屋号はそれを意識して付けたものの。農業は特別な職業ではなくて、選択肢の一つとしてどんな人でも参入できる場をつくりたい。

自分の出身地である酒田市には、平田牧場というお手本になるいい事例がある。農業を通じて地域の活性化、雇用創出に結びつけばと思っている。

(G氏)

みなさんの話を聞いて非常にうれしく思っている。

自分自身のことになるが、現在の道の駅を辞めた場合には、20haのブドウを栽培すると以前から公言してきた。なぜ、こう言えるかといえば若い頃から自分なりの販路を開拓してきたからである。

若いみなさんには、自分の目標の実現のため、前に向かって進むことと人とのつながりを大事にしてもらいたい。

(司会)

他の参加者のみなさんに聞いてみたいことがあったら発言願いたい。

(D氏)

Aさんにお聞きしたい。自分の会社を持つことが夢とのことだが、それは自分一人で会社を持つのかそれとも仲間と組んで会社を持つイメージか。

(A氏)

同じ志を持つ仲間が集まるのであれば、仲間と一緒にやってみたい。

(C氏)

Dさんにお聞きしたい。これから給食向けの調理加工を始めるにあたっては、材料の確保が当面の課題である。シイタケを卸してもらうことは可能か。

(D氏)

対応可能である。

(副知事)

Eさんの地域では後継者不足が懸念されるという話であるが、Fさんの地域ではどうか。

(F氏)

45才までの独身者を後継者に含めるとすれば、ある程度後継者はいると思う。ただし、独身者のうち、結婚していない割合が6～7割である。

(E氏)

6次産業化の取組について、もう少し詳しく教えて欲しい。

(C氏)

自宅にある小屋を改築して加工所とする計画で従業員を雇用するのではなく、自分一人ですべての範囲から始める。父と母は栽培に専念し、自分が加工部門を受け持つ。

(F氏)

CさんとEさんにお聞きしたい。結婚をきっかけに農業に携わってみて、これまでとの生活の面での違いを感じることはあるか。

(E氏)

朝から晩まで仕事も生活も家族と一緒に過ごすので、その点では閉鎖的である。その反面、規則正しい生活が送れるので子供にとっては良い面が多い。

(C氏)

Eさん同様、閉鎖的な面はとてつらく感じる一方で、家族がずっとそばにいるおかげで周りの子供たちに比べて情操的に育っていると感じている。

(B氏)

自分は未婚ではあるが、農業をつづけながらの結婚、出産というのは不安がある。みなさんの農業と出産、子育ての両立の仕方について教えてもらいたい。

(C氏)

家族の理解があり、子供優先にしてもらってきた。田植え、稲刈りで人手が必要な時はやむをえず、子供をおぶって作業をした。農家の方は家族を大事にするのでその点は心配いらぬのではないか。

(E氏)

家族の協力無しでは育児も出来なかった。妊娠中は動けない時もあり、その時は家族に協力してもらった。生まれてからは、保育所に入ってなくても一時的に預かってもらう市の制度を利用したり、家の中でできる作業をするなど工夫をしながらやってきた。

(A氏)

北海道の酪農家の場合は、酪農ヘルパー制度という制度があると聞く。この制度は酪農家が休みをとる際にヘルパーの方が代わりに搾乳などの作業を行ってくれるものである。

畑作でもハウスの開け閉めの管理などスポット的に外部の方に対応してくれる仕組み、労働力をシェアする仕組みがあればいい。

(司会)

県庁の担当課へ伝えておく。

(F氏)

若い人が農業を継ぎたくない理由の一つとして、家族との同居を望まないことが挙げられる。農業後継者育成のために若手農業者専用の公営住宅を設置してはどうか。

(司会)

話は承る。

(副知事総括)

本日はお忙しい中、御参加いただき厚くお礼申し上げます。御参加の皆様のお話を聞いて、様々な作

目や営農形態で、しかも若手の方がこの横手平鹿地域で特色ある農業を展開していることを改めて感じている。

Aさんが平田牧場の話をされていたが、私も社長の新田さんと何度かお会いしたことがあり、いろいろな話をうかがっている。新田さんが酒田で養豚を始めて現在まで発展しているのは、突出した努力があつたことであり、そうした方の努力が地域農業の発展に大きく貢献している。そうした方を一人でも多く出すことが、地域の農業全体の底上げに大切である。この地域で言えば、Gさんであり、また、みなさんにもそういった存在になってもらいたいのが私の願いである。

今、私が持っているのは「のんびり」という県外の方向けの雑誌で、今回の第13号はGさんの特集である。

Gさんのこれまでの販路を確保する取組を県内へ更に展開するためには、生産者やJAがやっていくには荷が重い面がある。行政が主導又はサポートしながら進めることが不可欠であると思っている。

以前、千葉県の柏市にある京北スーパーの方に話を伺う機会があり、秋田県の農産物の評判を聞いたところ、商売の仕方は下手だけれども、商品そのものはいいし、包装でごまかすということもないということであった。やはりいいものを作ることはもちろんであるが、それを消費者にどうやって届けていくかを深掘りしていきたい。

今日の参加者は地元以外の出身の方が3人いらっしゃるが、農業や産業の発展を考えるうえでは、外から入ってきた方の視点や取組が重要である。横手平鹿地域では、様々な作目に取り組んでいる方がいるので、お互い刺激し合いながら、協力又は連携ができそうな感じである。

新規就農の時は国、県、市それぞれの支援制度が手厚いが、その後一人立ちしてやっていく際はきめ細かい支援が必要である。その後、どういう方向に進んでいくのか、加工販売まで視野に入れた6次産業化へ向かうのか、生産のみに徹するのか、そこに関しては選択の余地があると思う。選んだ道に対して邁進してもらいたい。当然、6次化の取組であれば十分な支援をしていきたい。

最後にAさんのお話についてであるが、これまでは近隣の農家どうしでカバーし合っていたが、今の地域農業の状況ではそれも難しい状況にある。仕組みとして構築する時代になってきたと感じている。

またFさんの話であるが、これは農業者専用の住宅又は公営住宅の農業者版といったところか。なるほどと思ったし、我々の年代では出てこない発想である。農業法人で働いている方であれば、自宅と勤務先が遠い場合もあり通勤している方も多いと思うので職場に近いところに住みながら農業に従事するのも一つのライフスタイルかもしれない。

最後になるが、本日はみなさんから率直な意見をいただき、本当に感謝申し上げます。

(終了)